
黒白の退魔師

日平 雅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒白の退魔師

【Nコード】

N8005I

【作者名】

日平 雅人

【あらすじ】

人を襲い、人を喰らう「悪魔」。その悪魔から人々の命を守るのが退魔師の仕事。主人公のスイナは、退魔師になる事を夢見て、退魔師の養成学校「聖十字黒白学園」に入学するが・・・学園系退魔ダークファンタジー、ここに始まる！！

第1話：邂逅（前書き）

「学園系」と言うジャンルに引かれて来たソコのあなた！
すみません、第1話には学園要素0です。

このストーリーは、一人の少女が退魔師を目指して成長していく過程を書いたダークファンタジー物です。つたない文ですが、読んで頂けたら嬉しいです。

第1話：邂逅

「誰かたすけて！」

彼女は暗い夜道を走りながら叫んだ。

満月の月明かりに照らされている彼女の顔には、涙が溢れていた。

彼女はまだ子供。年は12、13歳くらいだろうか、明るく短い茶色の髪はボサボサ、紅く透き通るような瞳からは大量の涙、顔は涙でグシャグシャだが、多分、泣いていなければとても可愛いらしい顔だろう。

結構小柄、そしてガリガリに痩せている細い体型の彼女が着用している物といえば、麻でできたボロボロのワンピースのみ。

靴等は履いておらず、裸足。

彼女は、何かに追われていた。

黒い大きな体、真っ赤で濁るような目、手からは鋭い爪が生えており、大きな口、四足歩行の悍ましい生物。

「誰か、誰かあ」

彼女は必死に叫んだ。大きな声で。

しかし、ここは人里離れた「モルフオの森」。

どれだけ叫んでも人はいない。

「誰か助け・・・っきゃ!!」

ドサっ！！

彼女は叫ぶのに夢中で足元の木の根に気づかず、それに躓き転倒。

「痛っ・・・」

彼女は顔を上げる。

目の前には、あの黒い悍ましい生物。
大きな口からはヨダレが垂れている。

（いや、まだ死にたくない・・・）

彼女の口は恐怖でカチカチと鳴っている。
瞳からは相変わらず大粒の涙。

「ガルルル！！！！」

黒い生物は唸りながら彼女に接近、彼女の頭には生物の唾液が掛かる。

（あ、足が動かない・・・）

彼女は逃げようとするも、恐怖で足が動かない。

（いや、いや、まだ生きたい・・・）

「ガオオオオオオオオオ！！！！」

生物が一際大きな雄叫びを上げた。

（食べられる！！）

彼女は両手で頭を抱え込み、その場でうずくまる。
体は震え、口からは嗚咽、もう死を覚悟した。

「ガオオオオオオオオオオオオ！！」

黒い生物が彼女を食べようとした
その時・・・

「メティオ！！」

凜とした、女性の声がした。

そして、それは突然起こった。

ボン！！

突然、生物の口が爆発したのだ。

「ガオオオオオオ！！？」

黒い生物の口は今、真っ赤に燃えている。

彼女は、恐る恐る目を開けた。

目の前には、ぐったりと燃え倒れているあの黒い生物、そして隣には白いコートを着た女性が立っていた。

「あなた、怪我はない？」

女性の視線は燃えている黒い生物に向けられているが、声は彼女に向けられていた。

彼女は何が起きたのか理解していない。

その時

「はあ、はあ・・・セルフイお前早過ぎだ」

遠くの方から、黒いコートを着た男性が走ってきた。

「リュイルが遅いだけ」

白いコートを着た女性——セルフイは、今走って来た黒いコートの男性——リュイルに向かいしれつと言った。

「はあ？ どうせお前、魔法陣使ったんだろ？ 卑怯だ！！」

「魔法陣、それは魔法師^{マジ}の移動手段。聖剣師^{エスカトル}とは違う」

二人は彼女をほっという口喧嘩を始めた。

桜色の長い髪、キリツとした藍色の瞳、色白の肌、恐らく十代後半だと思われるセルフィ。

濃い青色の短い髪、真ん丸の大きな瞳、色黒の肌、恐らくセルフィと同じで十代後半だと思われるリュイル。

二人はそれぞれ白、黒と別々の色のコートを着ていたが、二つとも右肩の辺りになにやらおかしなマークが。

「あ、あの・・・」

彼女は恐る恐る口喧嘩中の二人に話掛ける。

「あ!?!」

リュイルはセルフィとの口喧嘩を中断し、彼女の方を見た。

「あんた、名前は？」

リュイルは彼女に聞いた。

「・・・スイナ」

彼女——スイナは呟いた。

「スイナ、怪我はねえか？」

リュイルはスイナの体をじろじろと見る。

その間、スイナはずーっとだまりっぱなし。

「・・・怪我は無いみたいだな。スイナ、お前早く家に帰りな」

リュイルはスイナから視線を満月の空にむける。

ザワザワザワ・・・

夜風が木々を揺らす。

リュイルとセルフイは二人共空を見ている。

スイナは何故か、背中がゾクツとした。

「スイナ、早く帰れ、早く!!」

リュイルは強い口調でスイナに話す。

「え!?!」

「いいから早く・・・っ!!」

ガァーッー!!

何処からか何かの鳴き声らしき音が聞こえた。

「リュイル、多分ガーゴイルの群れ」

セルフィは空を見ながら呟く。

「ガーゴイルか・・・聖剣師の俺じゃ相性が悪い。悪いけどセルフィ、任せていいか？」

リュイルは地面に座り込んでいるスイナをおんぶしながら言った。

「わっ・・・ちょっと・・・」

突然のおんぶに戸惑うスイナ。

「ガーゴイルは私の得意分野。任せて」

セルフィはそう言うのと、コートのポケットから一枚のお札を取り出した。

「任せる！」

リュイルはそう言い、スイナをおんぶしながら走り出した。

「スイナ、家はどっちだ!？」

「・・・そこを右」

リュイルは言われた通りに右に曲がる。

「あの・・・」

スィナは聞いた。

「あなた達は・・・？」

「俺ら？」

リュイルは走りながら喋る。

「俺らは退魔師。さっきの黒い奴みたいなの（悪魔）をやっつけるのが仕事なんだ」

「悪魔・・・？」

スィナは不思議そうに呟く。

「悪魔を知らないの？」

悪魔ってのは、人々を無差別に襲うモンスター達の事だよ。例えば、さっきの黒い生物なんかは悪魔「キタベルス」って言うんだ」

「キタベルス・・・」

「そう。俺ら退魔師ってのは、そう言った悪魔から一般市民を守る事が仕事なの」

そう言い終えた瞬間、リュイルは急に止まった。

「ど、どうしたの？」

スイナは恐る恐る聞いた。

月明かりに照らされているリュイルの顔は、驚きの表情をしていた。

「先、越されたか」

それを聞いたスイナは、何かの気配を感じ、空を見た。
そして、スイナは驚いた。

今、スイナ達の上空には一匹のでっかいコウモリみたいな生物が
佇んでいた。

黒くシャープな体型、長細い口からは無数の牙が生え、羽は鋭く、
目は金色に輝いている。

「ガーゴイル」

リュイルはそう呟いた。

「・・・おっきいコウモリ？」

スイナはガーゴイルを見ながら呟く。

「スイナ、悪いけど少し降りてて」

そう言うところリュイルは地面に片膝をついた。

スイナは何も言わずそっとリュイルから降りた。

リュイルはスイナが降りた事を確認すると、その場で立ち上がり、
コートの内側、腰の辺りに下げてある鞘から剣を抜いた。

「剣？」

スィナは不思議に思い、リュイルに聞いた。

「さっきの女の人紙切れを持っていたよ？」

「あ、ああ。退魔師には二種類あって、セルフイは魔法師で俺は
エスカトル聖剣師だからな、当然だ」

「マジ？エスカトル？」

「んだよもう、魔法師ってのは魔法や術、札で戦う奴の事で白い
コートを着てるんだ。」

で、聖剣師ってのは剣や槍、弓で戦う人の事で黒いコートを着て
いる」

「ふん・・・」

「分かったなら木の陰にでも隠れている」

リュイルはそう言うのとシルバーに輝く西洋剣をガーゴイルに向け
て構えた。

スィナは言われた通りに木の陰に隠れた。

「ガァーァーァー！」

ガーゴイルは思いつ切り雄叫びを上げると、リュイル目掛けて突
っ込んで来た。

「来るか？」

リュイルは剣を垂直に立て、ガーゴイルの突進に備える。

「くそっ、今日は満月とはいえ、この夜の闇じゃガーゴイルの姿が確認しづらい」

リュイルは一旦後ろに下がる。

ガーゴイルはリュイルが元いた場所に突っ込んだ。
バシヤッ！！

「今だ！！」

リュイルは地面に着陸したガーゴイルに向かい剣を奮う。

しかし、ガーゴイルはすぐに離陸、あと少しの所でリュイルの剣をかわした。

「くそっ・・・」

相手が空中にいる以上、剣士のリュイルの攻撃は当たらない。

「ガァーァーァー！」

ガーゴイルは再び雄叫びを上げ、またリュイル目掛けて突っ込む。
ガーゴイルの攻撃方法は爪と牙。そのため、奴が攻撃をする時は必ず相手に接近する。

「来いよ！」

今度もまた後ろに下がるリュイル。聖剣師がガーゴイルと戦う場合、ガーゴイルの攻撃を外させてから叩くのがセオリー。

ガーゴイルは再びリュイル目掛けて突っ込んで来た。

しかし、リュイルはそれをかわす。

そして、地面に着陸したガーゴイル目掛けて再び剣を振った。

グサッ!!

ガーゴイルは見事真つ二つに。

「ふう・・・」

リュイルはガーゴイルの死骸を見ながら剣を鞘にしまう。

「スイナ、もう出て来ていいぞ」

その声にスイナは近くの木の陰からひょっこりと顔を出した。

「・・・すごい」

木の陰から出て来たスイナの第一声がコレ。

「まあな、退魔師なるもの、このくらいの力がなくちゃ、やって
けねえよ」

リュイルは得意げに話す。

スイナはリュイルではなく“退魔師”に深い憧れを持った。

（凄い・・・私にもあんな力があつたら・・・）

悪魔から人々の安全を守り、戦う退魔師・・・

スイナが感銘に浸っていると、突然、目の前の大地が丸く光り出した。

「えっ・・・！」

約一メートルほどの光る円。

そこから、一瞬にしてセルフィが現れた。

「うわぁっ！！」

驚きのあまりその場で尻餅をついたスイナ。

「なんだセルフィ、もう終わったのか？」

すると、セルフィの登場を静観していたリュイルがつまらなそうに聞いた。

「ええ、大量のガーゴイルをまとめて結界に入れて滅したわ」

「相変わらず恐ろしい話だね」

リュイルはそう言うのと、今度はスイナに話し掛ける。

「さて、とりあえずはスイナを家まで送りますか！スイナ、もう歩けるよな？」

スイナは軽く頷く。

「じゃ、行くか」

ここはガナール大陸。

広い島のような大陸で、楕円形のような形をしている。

そして、このガナール大陸には、三つの国がある。

島の南側、イガザ国

漁業が盛んな海の国。治安が良く、平和。

三つの国の中で一番悪魔が現れないことで有名。

昔から海での生活が盛んなため、国の民達は周りから「海の民」と呼ばれている。

国は南側にあるため、日照時間が長く、民のほとんどは色黒の肌をしている。

島の北側、トゲラ帝国

最も人口が多く、最も文明が発達している国。

国のあちこちには大きな街があり、民はとても裕福な生活をしている。

三国中、唯一貴族政治が行われている事で有名。
街は多くの人工物で出来ているため、民は「鉄の民」と呼ばれている。

国自体が北側にあるため、毎年積雪がすごく、民の肌は白い。

島の中央、ホラエラ共和国。

国のほとんどが山の国。昔、ホラエラとトゲラは戦争を起こしており、ホラエラは敗北、つい最近までホラエラはトゲラの奴隷国になっていた。

そのためか、ホラエラの民「山の民」はトゲラとイガザから差別を受けており、奴隷制度が無くなった今でも山の民は嫌われている。そして、今現在国には王が不在なため、政治は崩れ落ち、民達は非常に貧相な生活を強いられている。

盗賊が現れたり、餓死者が出たり・・・

民の肌の色は黄色。

ここ、モルフオの森はトゲラとホラエラの境界にある森。

「・・・んん」

スイナに連れられ、リュイルとセルフィが着いたのは一件の木の
家。

あちらこちらにシミが出来ており、今にも崩れ落ちそうな家。

（スイナって、山の民だったんだな）

リュイルは思った。

ここはぎりぎりでホラエラ共和国。

スイナの服装から、大体は予想していたが・・・

「スイナ、両親は？」

セルフィが家の明かりがついていない事を指摘しながら聞いた。

「お父さんもお母さんも、もう死んじゃったんだ。毎日ご飯が食べられなくて・・・」

スイナの目には、うつすらと涙が。

「ごめんなさい、私、つらい事聞いちゃったわね」
セルフィは軽く頭を下げる。

「いいの」

スイナは改めて二人を見る。

「今日はありがとうございました」

スイナは深々と頭を下げた。

「いや、こっちもコレが仕事だからな」

リュイルは頭をかきながら言う。

「スイナ、今何歳？」

「えっと、今年で13です」

「13歳で一人暮らしか・・・凄いな」

リュイルはイガザ出身、13歳の頃は海に潜ってばかりだった気がする。

ちなみに、現在リュイルは18歳、セルフィは17歳。

「じゃ、俺らもう時間だから行くな！」

リュイルは腕時計を見た。そろそろ戻らないとヤバイ時間だ。

「・・・・・・」

その言葉を聞き、スイナは黙り込んでしまった。

「スイナ、この辺りに他の家は？」

セルフィが一応聞いてみた。

「ない・・・です」

元気なさ気に答えるスイナ。

やはり・・・と、セルフィは思った。この子は孤独なんだと・・・

ガーゴイルに襲われた時、普通だったら恐怖で強張った表情をするのが当たり前だが、スイナは笑っていた。

まるで、友達と何かして遊んでいる子供のように・・・

それは、きつと久しぶりに人と接し、会話をしたから・・・

そして今、スイナはまた孤独と差別の世界に戻ろうとしている・・・

「スイナ、あなた、退魔師になりなさい」

「え!？」

突然の事に戸惑うスイナ。

「今から沢山勉強して、退魔師になりなさい」

セルフイは思った。

スイナが生き生きと生活するには目標が必要なんだと。

人生何にもなければつまらない。なら、目標を作ればいい。

目標があれば人はそれに向かって頑張れる。

「私が・・・退魔師」

「そう、スイナ、リュイルの戦い見たでしょ？退魔師は人々の命を悪魔から守る仕事なの。スイナ、その気があればなってみなよ」

セルフィがニツコリと微笑んだ。

（あ、セルフィが笑った。珍しいな）

リュイルはそんな事を思っていた。

「私が退魔師・・・私、退魔師になりたい」

スイナの瞳が輝いた。まるで、死んでいた目が再び生きだしたかのように。

「私、退魔師になって、いっぱい人を救いたい。セルフィさんとリュイルさんが私を助けてくれたように！」

その言葉にリュイルは軽く照れ、セルフィはさらに笑った。

「頑張って、退魔師になったら、また何処かで会えると思う。私達、待ってるからね」

そう言うと、セルフィはその場に魔法陣を出した。

「スイナ、あなたの性は？」

「スイナ・カラタです、セルフィさんは？」

「私はセルフィ・オーガバル。じゃあね、スイナ」

セルフィは魔法陣の光と共に消えた。

ほんの一瞬だった。

「さてと、俺も帰るかな」

リュイルはコートを羽織り直す。

「俺はリュイル・ネミリア。じゃあなスイナ、頑張れよ」

「はい、リュイルさん、ありがとうございました」

リュイルは右手を軽く上げると、スッと去って行った。

「お父さん、お母さん、私、やっと目標ができたよ!!」

私、退魔師になる!!」

第1話：邂逅（後書き）

この小説は多分、不定期更新になると思います。

なにしろ、メインで書いている小説がコレとはまた別にありまして・

・

すみませんが、そう言う事で。

では、また次回で！

第2話：出会い

その日は良く晴れていた。

雲一つない青空、鳥達は皆、優雅に羽ばたいている。

木々は紅や黄色に色づき、ここホラエラ共和国に秋が訪れようとしていた。

他の民から差別され、貧相な暮らしをしている山の民。

毎年、餓死者は増え続け特に子供や老人の死亡率は高い。

そして、国には盗賊が現れ、民の僅かな財産を奪っていった。

もうホラエラの政治は壊れ、人々は希望を諦め、ただ今を生きる事だけを考えて生活していた。

しかし、ここホラエラはウラー村に、まだ希望、夢を持っている少女がいた。

「地図持った、林檎持った、ランプ持った」

少女——スイナは麻でできたボロボロのリュックに荷物を入れていく。

あの事件から三年、スイナは一生懸命に働き、お金を貯め、勉強をした。

近くの綿工事で朝から晩まで働き、ろくに食事もせずに貯めたお金で教材を買い、勉強をした。

お腹が空きすぎて倒れた事もあった。盗賊に狙われた事もあった。しかし、スイナはそれでも諦めなかった。

絶対に退魔師になる、その目標がスイナに力を与えたのだ。

そして先月、僅かながらだがお金が貯まってきたので、退魔師になるための登竜門でもある「聖十字黒白学園」に入学願書を提出したのだ。

で、スイナは今から聖十字黒白学園があるトゲラ帝国のとある街「ブイッサ」に向けて旅立とうとしていた。

今日からあと一週間後にブイッサにて入学一次試験が行われる。

「・・・よし」

きっとトゲラに行ったら醜い目で見られるだろう、差別を受けるであろう。

しかし、それでもスイナはトゲラに行く。

絶対に退魔師になりたいのだ。

あの日の二人のような退魔師に・・・

あの日、二人が去ってから、この辺りにも悪魔が出現するようになった。

何人か、悪魔に殺されたと思われる死体も見てきた。

悪魔がいつ、この世界に現れたのかは分からない。しかし、悪魔は人々を襲う。よって悪魔から人々を守るのも、また人々だ。

「さてと・・・」

スィナは僅かな荷物が入ったリュックを背負い、家を出る。
相変わらずボサボサの明るい茶色の髪。三年前とは違い、今は肩
まで髪が来ている。

ボロボロの麻のワンピース、靴は履いておらず裸足。

この時期にこの格好はキツイが、仕方がない。お金は全て教材代
と願書やら何やらに使ってしまったから。

家を出てまず向かったのは家の裏、父と母の墓。

「お父さん、お母さん、私、行ってくるね」

墓の前で両膝を付き、手を合わせながら呟いた。

そしてスィナは、ブイッサ目指して旅に出た。

「ガァー！ー！ー！」

それは、家を出発してから10分も経たずに現れた。

「ガーゴイル・・・」

スイナはア然。目の前には三匹のガーゴイルの姿があった。

「ど、どうしよう」

まだ家を出てすぐの場所、こんなにも早く悪魔と出会うとは、スイナは思ってもみなかった。

「ガァー―――！」

ガーゴイルはスイナに向かって威嚇をしている。

「う・・・」

少し怖じけづくスイナ。

（だめ！ガーゴイルなんて怖がっていたら、立派な退魔師にはなれない！）

とは思うものの、今スイナの手持ちには悪魔に対抗出来る武器がない。

（どうしよう・・・）

スイナが悩んでいると、一匹のガーゴイルがスイナ目掛けて突進してきた。

「うわっ！！」

ドサッ！！

スィナは何とかガーゴイルをかわし、ガーゴイルは地面に突っ込んだ。

「くっ・・・」

スィナはその場から一気に走り出した。

とりあえず、武器がない今、一旦逃げようと、考えたのである。

しかし、残りの二匹のガーゴイルは走り逃げているスィナを上空からぴったしマークをしている。

「なんでついてくんのよぉー!!」

スィナは思わず叫ぶ。

しかし、ガーゴイルは必要に追いかけてくる。

そして何より、スィナよりガーゴイルの方が早い。

スィナはあつと言う間に一匹のガーゴイルに先を越され、後ろからきたガーゴイルと挟み撃ちにあってしまった。

「・・・わ、私を食べても、お、美味しくないわよ・・・」

声が震えているのが情けないとスィナは思った。

しかし、ガーゴイルには言葉は通じない。

「どうしよう」

スィナが考えていると、二匹のガーゴイルが仲良く一緒に突っ込んできた。

「ガァーーーーー!!」

「ちょっ、やめっ、」

スィナはその場でしゃがみ込んだ。
三年前のあの日と似ている状況。

「・・・っ!」

しかし、あの日のスィナと今のスィナは違う。
スィナはガーゴイルが突っ込んでくる寸前、一気に前方に飛び出した。

「・・・くっ!!」

歯を食いしばりながら一気に跳躍、間一髪、ガーゴイルの攻撃をかわした。

「よしっ!!」

スィナは体制を立て直し、一気に走り出す。

「ガァガァ!!」

背後ではガーゴイル二匹が頭からぶつかり合い、痛みの悲鳴を上げていた。

（よし、後はこの先の曲がり角を曲がれば、結界の貼ってある村に着く）

スイナはスーパー全力ダッシュ！

しかし・・・

スイナが曲がり角を曲がった先には・・・

「ガルルル！！！」

「げっ！！！」

黒い大きな体、紅く濁った目、鋭い爪、悍ましい口、四足歩行の悪魔・・・

「キタベルス！！！」

スイナは突然の出来事に足が止まった。

「ガルルルル！！！」

キタベルスはスイナを発見するやいなや、威嚇を開始。紅い目が怖い。

そして後ろからは先程のガーゴイルが三匹。

「ガルルルルル！！！」

「ガァー！！！！！」

「最悪だ・・・」

合計四匹の悪魔に挟み撃ちにあったスイナ。

「どうしよう………っん!？」

その時、何処からか人間の声がしてきた。

「悪魔戦乱の嵐、孤高の光稲妻、龍燐の吐息、闇夜の屍……」

(ん? 確かこれって……)

スイナが何かを思いだそうとしたその時、突然キタベルスの背後に人影が現れた。

それは、白いコートを着た男性。

「封殺詠唱、風の二十三番、〔剛雷天嵐〕!」

男性は右の手の平をキタベルスに向けた。

「そこのお嬢さん、伏せて下さい」

男性の言葉に気が引かれていたスイナはハッと我に返り、すぐさまその場に伏せた。

そして

「滅せよ!」

と、男性が叫んだ途端、男性の手の平が光出し、そこから物凄い

突風が吹き出した。

ゴオオオオオオオオオ！！！！

物凄い轟音、そして突風はキタベルス、ガーゴイルをかなりのスピードで包む。

そして、風が悪魔を包んだ途端、風に雷が走った。

スイナは伏せながらキタベルスの方を向いた。

キタベルスは口を大きく開けて、苦しみながら何か叫んでいる。しかし、風と雷の音が大き過ぎてキタベルスの声が聞こえない。

ガーゴイルに至ってはもう姿がなく、滅されていた。

そしてキタベルスも、すぐに屍となった。

「すごい・・・」

スイナは驚いた。わずか10秒ちょっとで四匹の悪魔が滅されたのだ。

「大丈夫かい？お嬢さん？」

風が止み、白いコートの男性が近寄ってきた。

「えっと・・・」

スイナは戸惑いを隠せないでいた。

「ああ、驚かして済まない。僕はアルティン、アルティン・クロ

「ナ。宜しくね」

アルティンはニツコリ微笑んだ。

「アルティン・・・さん？」

スイナはアルティンのコートをまじまじと眺めた。

「ああ、僕はしがない退魔師でね、魔法師をやっているんだ」

恐らく30歳くらいだろうか、アルティンは薄いあごひげを触りながら答えた。

「ところで君は？」

スイナはアルティンが退魔師だと分かったと、急に立ち上がり、背筋を伸ばす。

「わ、私はスイナ・カラタです」

ハキハキとした態度のスイナ。

「スイナちゃんか、カワイイねえ」

にやけ顔のアルティンにスイナは少し怖じけづいた。
それに気づいたアルティンは慌てて説明する。

「ああ、心配しなくていいよ、僕はロリコンじゃなくてフェミニストだから」

「は、はあ・・・」

「あ、ああ。本当に心配しなくて大丈夫だから」

アルティンは必死な顔をしながら言った。

「なるほど、スイナちゃんは聖十字黒白学園の試験受けるんだ」

ウラーからブイツサまでの中間地点にある街、コーナタウン。

人口は百人くらいの小さな街。地面は石畳で舗装され、民の家のほとんどはレンガ作りの家。今、ここにスイナとアルティンは到着した。

「そうなんです。やっと願書が出せるようになって・・・あれ？
そう言えばアルティンさん、なんであんな辺境の道なんかに行ったんですか？」

スイナはアルティンに聞いた。

「ああ、僕は今回、任務でこのコーナタウン付近の悪魔を退治をしに来ていたんだよ。そしたら、突然キタベルスの声がして、声の方に行ってみたら君がいたわけ」

「ふん・・・」

スイナは少し考える。

「あの・・・」

「なんだい？」

「さっきアルティンさんが悪魔に撃ったのって、封殺詠唱風の唱ってやつですか？」

封殺詠唱

これは魔法師が悪魔に対して放つ攻撃魔法の事。

封殺詠唱は大きく分けて五つの種類がある。

炎の唱…炎を中心に使う攻撃力重視の魔法
風の唱…風を中心に使う機動力重視の魔法
氷の唱…氷を中心に使う命中力重視の魔法
光の唱…光を中心に使うバランス重視の魔法
闇の唱…闇を中心に使う扱いの難しい大技魔法

そして各唱には一から百までの番号がついた技があり、各技の前文を詠唱する事で魔法を放つ事が出来るのだ。

しかし、封殺詠唱は体力を使わない代わりに精神力を莫大に使用するため、体力重視の聖剣師には撃てず、精神を鍛えている魔法師にしか撃てないのだ。

「スイナちゃん、よく知ってるねえ、確かに『剛雷天嵐』は風の唱の二十三番、相手を風で束縛し、雷で攻撃を仕掛ける技だ」

アルティンは感心したように頷く。

「そう言えばスイナちゃんって魔法師になりたいの？聖剣師になりたいの？」

スイナは少し困った表情をした。

「うーん、実はまだ決めてなくて・・・」

「そうか。それならまだ時間はある。ゆっくりと決めたらいいよ」

アルティンは空を見上げた。

空はもうオレンジ色に染まっていた。

「じゃあ僕はそろそろ時間だから、本部に戻らなければ」

アルティンはその場に移動用の魔法陣を出した。

「スイナちゃん、良かったらブイッサまで送ろうか？」

その言葉にスイナはピクツと反応。

「いいんですか!？」

「ああ、別に構わないよ」

アルティンは魔法陣の端を軽く指で触り、少し広げた。

「さ、この魔法陣の中に入って」

「ありがとうございます!!」

スイナはワクワクしながら魔法陣の中へ。

魔法陣の中に入った途端、石畳の冷たさで冷たくなっていた足の裏が、ほんわかと温かくなるのを感じた。

辺りは光のバリケードみたいなもので囲まれている。

「いくよ」

その瞬間、一瞬スイナの頭は真っ白になり、気がつくといつの間にか知らない街に来ていた。

「すごい!一瞬で違う街に来ちゃた!!」

初、魔法陣に興奮するスイナ。

「すごいだろ?では僕は本部に戻るよ」

アルティンは再び魔法陣を作りだす。

「アルティンさん」

スイナはアルティンに向かい頭を下げる。

「今日は本当にありがとうございました!!」

それを見てアルティンは軽く笑った。

「いいえ、どういたしまして。

スイナちゃん、試験頑張ってね」

「はい！」

アルティンはスイナの返事を聞くと、魔法陣を使ってスッと消えてしまった。

（よし、入学一次試験、絶対に頑張ろう!!）

スイナはそう、心に誓った。

第2話：出会い（後書き）

すみません、今回も学園系は無しです。

次回、聖十字黒白学園入学一次試験、スタート！

第3話：差別

トゲラ帝国はとある山脈のふもと、とても険しい環境の中に、一つ、とても大きな建物があつた。

辺りに広がるのは、鬱蒼とした森と断崖絶壁の岩山、大きな建物以外、建物らしい物は何一つ見当たらない。

その大きな建物はコンクリートで出来ており、入口と思われる大きな扉以外窓などが一切ない。

この露骨な建物こそ、退魔師たちの拠点「黒白教会」だ。通称「クロシロホーム」。

四方を結界で囲み、悪魔を寄せ付けない鉄壁の要塞のようなたたずまい。

ここにくるのは、退魔師と、その関係者達のみ。

そんな、クロシロホームの内部は、意外とアットホーム的な優しい作り。

任務を終えた退魔師達の疲れを癒す空間、鍛練をする部屋、大食堂、巨大銭湯、退魔研究室など、かなりの部屋がクロシロホームにあり、その分敷地がバカみたいに広い。

そんな、クロシロホームのとある部屋、入口のプレートには「教

団長室」と書かれていた。

その教団長室の前には、一人の男性。

薄いあごひげ、優しそうな蒼い瞳、赤みが掛かった短髪、そして膝まである白いコート。

コンコン！

男性——アルティンは教団長室のでっかいドアをノックした。

すると、「どうぞ」と、部屋の中から声がした。

「失礼します」

アルティンはそっと扉を開ける。

アルティンが部屋の中に入ると、そこには一人の男性が。

「アルティン、次の任務だ！」

「・・・・・・・・」

「・・・・あのー」

「・・・・・・・・」

「あの、すみません」

今、スイナは試験会場の受付にいた。

アルティンに送ってきてもらってから一週間、スイナは何とか飢えをふせぎ、第一試験日の今日、いま受付をするところなのだ。

しかし・・・

「すみません!!」

「・・・・・・・・」

受付の人はスイナを完全無視。
しかし、スイナは諦めない。

「すーいーまーせーん!!!!!!」

「うるさいっ!!」

突然、受付の人（中年の男性）が叫んだ。
突然の事にスイナはビックリ!

「さっきからあーだこーだと、うるさいんだよ、山の民が!!」

差別・・・しかし、スイナはそれには慣れっこ。

「わ、私はちゃんと願書を出しました。だからいいじゃないですか！」

「なんだ！山の民が偉そうに！お前なんか退魔師なんか無理だ！！！」

「なっ・・・中年のデブのあなたに何が分かるんですか！！」

「この・・・クソガキがあゝ！！！」

受付の人は今にもカウンターを乗り越えて殴り掛かってきそうな勢いだ。

スイナは少し後ずさる。

（少し・・・言いすぎたかな・・・）

受付の人はついにカウンターを乗り越えた。

スイナの後ろで受付を待っていた青年はびっくりしている。

（や、やばい！！）

スイナは回れ右をすると一気にダッシュ！！

「待て、クソガキ！」

受付の人はスイナを追ってきている。

「くっ・・・」

スイナは受付会場ドームの出口へ全力疾走。

その時！

バンっ！！

誰かとぶつかった。

スイナはその勢いで顔面から倒れた。

「痛ったゝ・・・」

スイナは顔を押しえながらのたうちまわる。

「大丈夫か？」

ぶつかった人であろう、黒いコートを着た男性がそつとスイナに手を差し出してきた。

「す、すみません」

スイナは男性の手を握り、ぐいっと立ち上がる。

すると・・・

「あ、ナバルさん、そのガキ捕まえて！！」

猛ダッシュで走ってきた受付の人が、スイナとぶつかった人に向かい叫んだ。

「は？なんで？」

「そいつは俺の事中年のデブって言ったから！」

「事実じゃん・・・」

黒いコートの男性――ナバルは、鼻を摘んでいるスイナを見た。

「大丈夫？鼻血か？」

「あー、大丈夫です」

スイナはすぐに出口に向かい走ろうとしたが、ナバルに腕を掴まれた。

「だーいじょうぶ。俺があのおっサン説得してやんから」

ナバルはそう言うのと走ってきた受付の人の前へ。

「ナバル君、そのガキを俺によこせ！！」

怒り状態の受付の人。

「まーまーおっサン、本当の事言われたくらいでかりかりしない」

ナバルはワックスで固めてあるオレンジ色の髪を軽く整えながら言った。

「ナバル君、何言ってるの！？」

「だってそうじゃん、オッサン太ってるし、もう年だし・・・それに、あんなペツタンこいじめて何が楽しいの？」

ナバルはちらっとスイナの方を見た。特に胸部。

「なっ・・・!!」

スイナはナバルが自分の事を言っていると分かると、顔が真っ赤に、そして鼻血が大量に!!

それに比べ、ナバルはつまらなそうな顔。

「な、ナバル君、君はどっちの味方なんだ」

受付の人は結構テンパっている。

「うーん、俺は昔から面白そうな人の味方!」

ナバルはそう言うと、鼻血と対決中のスイナの元へ。

「あんた、名前は？」

「す、スイナ・・・」

「スイナか。俺はナバル。退魔師。よろしく!」

ナバルはコートのポケットからティッシュを取り出すと、スイナに向かい投げた。

「えーいナバル君、いい加減そのガキをこっちによこせ、そいつ

は山の民なんだぞ」

受付の人は着ている長袖の服の袖から仕込みトンファーを取り出した。

「げっ！！待てオッサン、ここじゃマズイって」

怒りモードの受付の人——もといオッサンは、既に戦闘体制。

「だから俺、短気な人は嫌いなんだよ。退魔師は暴君をやっつける仕事じゃないの！」

しかし、オッサンはナバルの話を無視し、スイナに一直線。

「うそっ！！」

スイナはすぐに逃げる体制。しかし・・・

「受付がちよーしこくな、バカ」

オッサンとスイナの間にナバルが入り込む。

「ナバル君、どいてくれ！！」

「やだ」

そう言うとナバルは一気にオッサンに接近、腰にぶら下げている刀を鞘ごと持ち、オッサンの脇腹に向かい振るう。

バキッと、嫌な音がした。

そして、オッサンはスローモーションのように倒れていった。

どさっ・・・

「・・・やり過ぎた」

白目で泡を吹きながら倒れているオッサンを見ながらナバルが呟いた。

その後、新たな受付の人が残りの入学希望者の受付を担当、スィナも無事、受付を済ませた。

「受付を終えた人から更衣室にて訓練用コートに着替えて、魔法師希望の入学希望者は1番ゲート、聖剣師希望の入学希望者は2番ゲートにお集まりください」

ドーム内に鳴り響くアナウンスを聞いたスィナは、とりあえず更衣室へ。

(どうしよう・・・)

ざっと見た所、入学希望者は二百人以上はいる。
しかも、まだ魔法師か聖剣師かを決めていないのは二百人中多分

スイナだけ。

（と、とりあえず私、魔法使えないから、今は聖剣師・・・にしておこうかな・・・）

かなりいい加減な理由だが、確かにスイナは魔法の使い方が分からない。

とりあえずスイナは更衣室に入り、受付で渡された訓練用コートに着替える。コートは退魔師が普段着用しているコートと全く同じ素材でできた膝まである大きなコート。

コートの下には専用のジーンズみたいなズボン、それにブーツ、手袋。

コートの色は黒でも白でもなく、灰色。
恐らく、訓練生という意味だろう。

（す、すごい・・・）

超がつくほどの貧民だったスイナにとって、この服装は豪華すぎると言っているほど。

（ま、まだ入学もしていないのに・・・）

スイナは更衣室の壁に備え付けてある鏡の前へ。

そこには、何となく退魔師みたいな感じのスイナの姿が。

（すごーい！！）

その時

「入学希望者は至急、ゲートに集合して下さい」

アナウンスがドーム内に響く。

「はっ!」

スイナはぱっと気づき、急いで着替えを済ます。

貴重品や元着ていた服などは受付で渡された袋に入れ、受付に預ける。

「えーっと、2番ゲート・・・」

スイナは2番ゲートをさがす。

ドームの中は分かりやすい構造にはなっているものの、人が多過ぎてゲートの看板が見えない。

（あゝもう!）

現在16歳、身長150センチくらいと、スイナはあまり大きくない。

このドームにはいろんな国からいろんな年齢の人がやって来ている。

そのため、女の子で低身長など、人混みに流されるだけの存在に等しい。

「ちょ・・・まっ・・・うう・・・」

いつの間にか人の波に飲まれていたスイナは圧死しそう。

ゆっくりゆっくりと人に流されていくスイナ。

(きつい・・・息がしにくい・・・)

その時、誰かの尻がスイナの顔面を直撃！

どんっ！

「むぎゃっ！！」

スイナはバランスを崩しその場で倒れた。

「あらあら、ごめんあそばせ」

スイナにぶつかったデカ尻の人・・・は、ふくよかな女性だ。
何か香水くさく、パールなどの真珠のネックレスを首に掛け、
厚化粧、マスカラたっぷりの目、髪はおだんご。多分40は
いるだろうか。

(この人、もしかして貴族の人！？)

スイナがア然と言った表情で女性を見ると、女性は突然、
倒れているスイナに蹴りを入れてきた。

ばんっ！！

「ぐっ・・・」

蹴りはスイナの腹を直撃、スイナは腹を押さえながらうずくまる。

「あなた、よく見たら山の民じゃない。あらま、わたくしったら謝ってしまったわ」

女性は凄いい形相でスイナを睨みつける。

「小娘、あなた死になさい」

女性は懷から短剣を取り出し、スイナに投げた。

スイナは突然の事でビックリ。

「わたくしはね、あなたみたいな山の民が大嫌いな。人にぶつかって謝りもせずにわたくしに謝らせて。だから死になさい」

ぶつかってきたのはそっちでしょ、とスイナは言いたかったが、腹に力が入らず断念。

「さ、早く死になさい。わたくしにぶつかった罪は重いわよ」

女性は「おほほほほ」と高飛車な笑い。

「黙れ・・・」

やっと声が出せたスイナだが、超小さい声。

「あらあら、何かしら山の民小娘」

「黙れってんだよ、このボンボン」

スイナはぬくつと立ち上がる。

「こっちはね、必死に勉強して、必死にお金貯めてここに来てるのよ、あんたみたいなボンボンに何が分かるのよ」

言い忘れていたが、スイナは短気。

「それにぶつかって来たのはあんたの方でしょ」

「んまあゝ!!」

女性はカンカンだ。

「山の民が偉そうに・・・貴方、わたくしを誰だと思っているの？ わたくしはマーゼラ・ハリトンよ、ハリトン家なのよ！」

（やっぱり貴族か）

スイナはそう思いながら足元の短剣を拾う。

「何貴方、わたくしをソレで刺そうとでも？ 馬鹿馬鹿しい。わたくしは柔道三だ・・・」

次の瞬間、女性――マーゼラの首元にはスイナの持つ短剣の刃が。

それを見て青ざめるマーゼラ。

「・・・私はね」

スイナはポツリとつぶやく。

「約束したの、退魔師になるって。あの二人に」

マーゼラは動かない、いや、動けない。

「必死に体力作って来たのよ、あんたはしてないでしょ？体力作り」

スイナはマーゼラの体、とくにふくよかな腹部を見る。

「う、うるさい。わたくしは柔道三段よ。貴方みたいな山の民に・・・」

「山の民なめるなあゝ！！！！」

スイナは思い切りマーゼラの腹にパンチ！

「がばっ・・・」

マーゼラは一撃でノックダウン。

（あ・・・やり過ぎた！！）

マーゼラは白目に泡を吹き倒れている。

細い体から出た渾身の一撃は、ふくよかな貴族を吹っ飛ばした。

先程のナバルの気持ちが少し理解出来たスイナだった。

周りの、刺すような視線が痛い。

スイナは2番ゲートの入口にいた。

さっき吹っ飛ばしたマーゼラはあの後すぐに意識を取り戻し、逃げるように1番ゲートに向かっていった。

（参ったなあ）

スイナは周りの視線を避けるため、軽く俯く。

その時

「おーおー、結構集まってるな」

突然、前の方から声がした。

（ん？この声は・・・）

スイナは顔を上げ、前を見る。

「ざっと百人って所か、おーしお前ら、注目」

（あのオレンジの髪は・・・）

スイナ含め、聖剣師希望入学希望者は皆、彼の方を向いた。

「俺はナバル・ウイリア16歳。これでも退魔師二年目、そして今日君らの審査員。よろしく！」

ナバルははにかんだ。

第3話：差別（後書き）

どうでもいいですが、タイトルの「黒白の退魔師」は（くろしろ）ではなく（こくびやく）と読めます。

・・・どうでもよくはないか・・・。

第4話…一次試験

「ダクラニウム」

それはトゲラ帝国の北側にある「サッター山脈」から採集できる蒼色の鉱石の事。

ダクラニウムは磁場やその土地の影響で作られる鉱石で、他の鉄鉱石や石ころに比べたら格段に軽い。

そしてダクラニウムはこの世界で唯一、悪魔に対してダメージを負わせる事のできる物質なのだ。

まだその理由、メカニズムはわかっていない。

ただ、普通の鉄の武器や鋼の武器ではびくともしない悪魔は、このダクラニウムを使った武器で攻撃を受けると、ダメージを負うのだ。

そのため、退魔師、特に聖剣師が使っている武器（剣や槍等）は全てダクラニウムで出来ているのだ。

そして、魔法師が使っている魔法の原料にも、このダクラニウムは使われている。

「入学一次試験の説明をするぞ！よく聞けよお前ら！」

ナバルはかなりの大声で叫ぶように話す。

「第一試験は屍グールの討伐テストだ！」

屍グールとは悪魔の一種でゾンビみたいなやつだ。

悪魔の中では殺傷能力が極端に弱く、RPGゲームで言う、序盤のそのまた初めに出てくるような悪魔。

「各自武器はこっちから支給するから準備が出来たやつから武器を取りにこい！」

ナバルはそう叫ぶとゲートの奥へ。

それに続き、多くの人達がゲートの奥に入っていく。

もちろんスイナもその中にいた。

国立聖十字黒白学園聖剣師希望者入学一次試験

試験内容は屍グールの討伐。

試験会場は2番ゲート奥にあるドームの裏庭「モノクロの庭」にて。

一次試験合格条件は30分以内に屍グールを30体以上倒す事。

武器は太刀、西洋剣、弓矢、槍、ハンマー、ナックルダスターの6種類、全てダクラニウム製。

他の試験者への妨害はなし、もし妨害した場合は即刻退場。

もし、何らかの理由で試験続行不可能と判断された試験者は監察官の指示に従い裏庭から退場する。

「じゃあお前ら、この中から武器を選べ」

ナバルは試験者達に武器を選ばせ始めた。

（うーん・・・何がいいだろうか・・・）

スイナはとりあえず西洋剣を手にとってみた。
意外と軽いながらも切れ味は良さそう。

次は太刀を手取る。

西洋剣よりリーチが長い分重さがある。
スラッと伸びた刃は輝くシルバー色。

・・・ちなみにだが、元々蒼色のダクラニウムは原石から武器に

加工する際にその色は失われてしまうのだ。理由は相変わらず不明だが・・・

「おし、俺はこのハンマーでいいや！」

「じゃあ俺はこの槍にしよう！」

「やっぱり唯一の遠距離攻撃ができる弓矢だろ」

周りの試験者達は次々に武器を選んでいく。

「どうしよう・・・」

スイナはまだ決められないでいた。

（そう言えば・・・）

スイナはふと思い出す。たしかあの時、リュイルが使っていたのは西洋剣だったな・・・

スイナは再び西洋剣を持った。

自分の憧れの人が使っていた武器。

そう、全てはこの剣の凄さに惚れて退魔師を目指したのだ・・・。

（この西洋剣にしてみようかな・・・）

スッと剣を構えてみる。

刃がキラッと輝いた。

「・・・よし！」

スイナは西洋剣を鞘に入れ、ドームの裏庭へ向かった。

モノクロの庭

一面に木々が生い茂り、この季節のせいもあってか葉は赤く紅葉している。

足元には落ち葉のじゅうたん、落ち葉を踏むたびにカサツカサツと音を鳴らす。

赤と黄色と橙の世界と言った感じだ。
モノクロの要素が一つもない。

「この庭には大量の屍グールが潜んでいる。そして木々の上には監察官も潜んでいるからズルはできねえぞ」

ナバルは皆が集まったのを確認。

「じゃあ・・・始めるかな。30体倒したら監察官が君らに声掛けから、それまではまあ、頑張ってくれ。では始め！」

ナバルが手元にあった旗を上げた。

それがスタートの合図

皆はそれぞれ勢いよく走って行った。

（よし、行こう！）

スイナも皆の後を追ひ、庭の奥へ。

モノクロの庭はかなり広い。

わかりやすく言うと東京ドーム三つ分くらい。

（あ！いた！！）

開始から間もなく、スイナは一体目の屍グールを見つけた。

全身茶色、何となく人の形に見える屍グール

ぽっかり開いたような真っ黒の目、その目がスイナを捕らえた。

「よし！」

スイナはその場から一気に跳躍、落ち葉を蹴り屍グールに接近。

屍^{グール}は動きがのろい悪魔。簡単に背後に回れる。

「ガガガ！」

ゆっくりながらもスイナの方を向こうとしている屍^{グール}

しかし、スイナの方が速い。

あっという間に屍^{グール}の背後へ。

「よし、もらった……ぐへっ……！」

ドン……！！

突然、スイナは誰かに押され吹っ飛んだ。

ズザザザザ……！！

落ち葉を舞い上げながら綺麗に飛ばされたスイナは近くの木にぶつかり、何とか止まった。

「痛っ……はっ！」

スイナが元いた屍^{グール}の場所に目をやると、そこには灰色のコートを着た若い男性の姿が。

スッ……

男性が腰にある鞘から一本の東洋刀（日本刀みたいな刀の事）を取り出す。

そして・・・

「・・・・・・・・」

ズサッ！！！！

ヒュンっと、刀が風を斬り、そして屍^{グール}を斬った。

「ガガガアア！！」

屍^{グール}はその一撃で真っ二つに。

そして屍^{グール}は滅された。

「ふう・・・」

男性は一息つき、刀を鞘にしまう。

カチイイイン・・・

刀が鞘に収まった。

その時・・・

ドドドドドドオオオオオオ！！

（ん？殺気！！）

男性は刀の柄を軽く握り後ろを振り返る。

しかし、そこにいたのは・・・

「どりゃああ!!」

男性が振り返ったその先には、飛び蹴りを仕掛けて来ている一人の女性の姿。

「な、ななな!!」

男性の顔面数センチ先には女性のブーツのつま先部分。

ドカーーン!!

「ぐはっ・・・」

男性は数メートル吹っ飛んだ。

「あんた、人の獲物勝手に取らないでよ!!」

女性——スイナは倒れている男性の前で仁王立ち。

「・・・痛っ!!」

男性はヒョイっと立ち上がる。

「おいテメエ何すんだガキ」

男性は恐らく二十歳前後の若者。

蒼く透き通るような瞳にキリッとした顔立ち、濃い青色の髪は目の辺りまで来ており、はっきり言って美男子。

「あんたこそ、人の獲物横取りして!このドロボウ!!」

「横取りもクソもあるかよ。あんなのは殺ったもん勝ちだ」

「だからって・・・」

その瞬間、スイナの首元には冷たい刀の刃が。
その動作は早過ぎてスイナには見えなかった。

「えっ・・・」

「こっちはお前みたいなガキには付き合ってらんねえんだよ。失せろ」

スイナの横隣にはあの男性の姿。手には先程の刀、その刃はスイナの首元を捕らえている。

「おいガキ、名前は」

「す、スイナ・・・」

「じゃあスイナ、もう二度と俺に近づくな」

男性はそう言うのと刀を鞘にしまった。

「あ、あんたこそ、な、名前何て言うのよ!」

残念ながらスイナの声は震えている。

「ウェルクだ。分かったならもう近づくな」

そう言う男性——ウエルクは庭の奥へと歩いて行った。

「……ふう」

その瞬間、スイナの緊張の糸がきれた。

「何なのよ、あいつ」

スイナはいつの間にか地面に腰を下ろしていた。
手が微かに震えているのが分かる。

「……」

スイナには見えなかった。ウエルクの刀が。

「……よし！」

何かの踏ん切りが着いたらしいスイナは、その場でガバツと立ち上がる。

（とにかく、まずは試験に合格する事を考えなくちゃ！！）

スイナはコートについた落ち葉を手で掃うと、再び屍グールを探しに庭の奥へ歩き出した。

その頃、モノクロの庭入口でもあるドームの2番ゲートには、黒いコートを着た二人の男性の姿が。

「なあ、ナバル。今回何人合格すると思う？」

黒い短い髪が隣にいるナバルに話し掛けた。

「知らねーよ、それよりダキム、お前見たか？」

黒髪の男性――ダキムは、はあ？と言った感じでナバルの顔を見る。

「いや、だから今回の参加者の中に、あの教団長の息子がいんだよ」

「教団長の息子？」

「ああ。確か名前は……何だったかな？」

「教団長の息子って言や確か、あの剣士のか？」

「そう。今回は自ら刀持参で参加してきたんだよ。多分、俺やお前、そんじょそこの先輩達よりかは強い」

「マジでか……」

ダキムはア然と言った表情でナバルの話を聞いていた。

（あの・・・最強坊ちゃんに参加してんのか・・・他の参加者達
は不運だな・・・）

「面倒くさいこったな・・・」

ナバルはつまらなそうに空を見た。

空は快晴だった。

第4話：一次試験（後書き）

次回、入学一次試験本格的始動！！

学園要素がまだ全然ないですが・・・もう少しで出て来る予定です。

第5話：試験終了

「ふんっ!!」

ズサッ!!

「グオオオ・・・」

たった今、一人の少女が一体の屍^{グール}を西洋剣で斬り裂いた。

「よし、これで23体目っと・・・」

少女——スイナはそう言うのと、剣を鞘にしまった。

「はあ・・・こりゃ結構キツイ」

スイナはドサッとその場に座り込む。

今回の屍^{グール}の討伐試験、内容自体は対して難しくはない。
屍^{グール}は動きが遅く、対した攻撃力もない。ただ・・・

「もう・・・何なのあの硬さは!!」

スイナは鞘から剣を取り出してみる。

刃は結構ボロボロ、綺麗なシルバーだった剣は、屍^{グール}の体液で茶色く変色し、刃自体がねばねばする。

そう、屍^{グール}は硬いのだ。

「あゝ手がジンジン痺れる・・・」

細いスイナの腕は軽く痙攣している。

「・・・でも、もうあまり時間がないんだし、休んでなんかいられない!」

そう言ってスイナはガバツと立ち上がると、剣を再び鞘に入れ、モノクロの庭でまだ行った事のない最奥部目指して走り出した。

「どりゃー!!」

ズサツ!!

「オラァー!!」

ズサツ!!

「フラァっ!!」

ズサツ!!

「よし、あと一体」

とうとう29体の屍^{グール}を倒したスイナ。
残るはあと一体。

「はあはあはあゝ・・・こりゃ結構しんどいわ」

腕はパンパン、手首は真っ赤。

そして、スイナの前には一体の屍^{グール}。

「・・・・・・・・よし、行くか！」

スイナはその場から勢いよく駆け出し、屍^{グール}に向かい刃をたてた。

「ピーンポーンポーンポーン・・・只今、試験時間30分が経ちました。試験者は速やかに庭から退場して下さい」

モノクロの庭にアナウンスが流れる。

それを聞いたスイナはフラフラしたあしどりで2番ゲートに戻って行った。

「全員集まったな。では今から一時試験合格者を発表する」

2番ゲートに全員集まった事を確認したナバルは、手元にある紙を見ながら言った。

「合格者は・・・ウェルク・ティラン、ナージ・フレムア、シクラ・トナサ・・・」

次々に合格者の名前が呼ばれていく。

そして・・・

「マックス・リーラー、ヒダ・ロン、スイナ・カタラ・・・」

スイナの名前が呼ばれた。

(よしっ!!！)

スイナは内心ガッツポーズ。

「カタビマ・チャル・・・以上21名。今名前呼ばれた奴は1時間後にドーム2階の試験室集合って事で。不合格者は受付で手続きを済ませたらもう帰っていいぞ。では解散」

そして第二試験。

内容は筆記テスト。

国語や数学、理科総合や地理歴史はもちろん、悪魔生物学、調合学、戦闘雑学、さらには魔法学、心理学までさまざま。

しかし、こつこつと勉強してきたスイナにとっては何とかなる範囲。

見事、筆記試験にも合格し、最終試験の面接へ。

「じゅ、受験番号3157番、スイナ・カタラです。よろしくお願いますっ!!」

面接中、がちがちだったスイナ。

しかし、10分程で面接は終了。

後は一週間後の結果発表を待つばかり。

そして・・・

スイナは見事、聖十字黒白学園に入学する事が出来た。

第5話：試験終了（後書き）

久々の投稿です。

今回にて物語の序章が終了、何か最後があやふやになりましたが・
・まあ、大目にみてください。

第6話：入学

「・・・これを持ちまして、第73期生、入学式を閉会致します」

聖十字黒白学園の一年の節目は春ではなく冬。

北の国トゲラ帝国は、今まさに雪景色。

空には分厚い灰色の雲、その雲から雪がしんみりと降っている。

人々は厚いコートを羽織り、手袋を着用。

吐息が白い。

まさに“THE・冬”といった感じだ。

そんな中行われた聖十字黒白学園の入学式。

バカでかい敷地の一角にある巨大ホールにて行われた。

ホール内は冷暖房完備、さらに床暖、椅子はモコモコ。

まさに寒さ対策は完璧といったところ。

学園長のながい話がメインだった入学式が終わり、スイナは椅子から立ち上がった。

（うゝ・・・暖か過ぎて眠い・・・）

ぐいっと伸びをして、頭の思考を切り替える。

学園は全3学年構成。

入学には年齢関係なし。学年は一年に一度、各学年での授業の単位を取り、進学試験に合格した者のみが次の学年に行ける。

そして、今期の入学生（一年生）は、聖剣師20名、全2クラス、各クラス10名に振り分けられた。

魔法師は28名、全2クラス、各クラス14名に振り分けられた。

つまり、今期の一年生は全4クラス、48名が入学したのだ。

（えゝっと、確か私は・・・“黒の二組”だったっけ）

スイナはとりあえず、学園内の案内掲示板を頼りに一年生教室棟へ。

(白の一组・・・白の二組・・・黒の一组・・・黒の二組、あつた!ここだ!!!)

一年生教室棟の一番端っこ、ここにスイナの教室があつた。

(・・・なんか、緊張するなあ)

教室には前と後ろの二カ所に扉がある。

そのうちの後ろの扉にスイナは手を掛ける。

教室の中からは、物音一つしてこない。

「スウ・・・ハア・・・」

とりあえず深呼吸。

スイナはしばらく黙り込んだあと、覚悟を決めて扉を開けた。

ガラガラガラっ!!

「・・・あ、あの・・・」

スイナが開けた扉の音に反応して、室内にいた人全員がスイナの方に視線を向けた。

「あ、あはは・・・どうも・・・」

皆無言。

(・・・怖っ!!！)

皆無言&スイナを凝視

(・・・)

何だか凄い圧力で、その場で直立不動になるスイナ。

(ど、どうしよう・・・)

クラスにはすでに7人の生徒の姿があった。

男性は5人、女性は2人。

皆、怖そう・・・

「・・・すみません」

「うわっ・・・!!！」

突然、スイナの後ろから声が。

「あの、ちょっとそこ、邪魔なんやけど・・・」

「えっ!？」

スイナが振り返ると、そこには黒髪の若い男性の姿が。

「あ、す、すみませんっ!!」

スイナはいそいそと道を開ける。

「ああいや、そこまで焦らんでも・・・」

男性はポリポリと頭をかく。

「ああ、もしかしてアンタもこのクラス？」

「え? ああ、まあそうですけど・・・」

「ほんまに? 俺も今日からこのクラスや。よろしくな」

「あ、はい! よろしくお願いしますっ!!」

大声で挨拶するスイナ。

「・・・あはは、元気いいな。俺はクシィ・キルラン。出身はイガサのニボン島っ言うところや。あんたは？」

「私は・・・」

その時、スイナは迷った。自分の出身地を何て言おうかと。また差別されるかもしれない。

「私は・・・スイナ。スイナ・カタラ、16歳」

結局、出身地は言わなかった。

「ああ、俺は18や。よろしくな」

そう言ってクシィは教室の中へ。

それに続き、スイナも教室の中へ移動。

室内には机が10個、前後二列で5個つず。黒板には「どこでもいいから着席して待機」の文字。

スイナは二列目の一番端っこ、窓際の席が空いていたので、そこに着席。

机椅子は木製。教室内には蛍光灯六本、黒板、ごみ箱、ロッカー以外は何もなし。

正方形の小さめの部屋だ。

（なんか・・・静かだな・・・）

スイナが机に頬杖をついてぼーっとしていたその時、教室の後ろの扉が開いた。

そして、一人の男性が入室。
スイナはその男に見覚えが。

（うそ・・・あれって・・・）

その男性はラスト一個の机、スイナの隣の席に着き、ぼーっとし始めた。

（あ、アイツはあの時の・・・）

その時、男性がスイナの視線に気付き、ふとこちらに視線を向けた。

そして、しばらく何かを考えているかようにこちらを見続け、何かを思い出したかのようにピクツと眉を動かした。

そして・・・

「確か・・・アンタ、一次試験の時のガキか？」

男性——ウェルクはしらっと話し出した。

第6話：入学（後書き）

作中で書き忘れましたが、学園は全寮制、制服は普通にブレザーにズボン、スカート。

さて、次回から本格的にストーリーリスタートです！

第7話：貴族

「皆さん初めまして。一年黒の二組担任のヨーラン・エノカームです。これから一年、よろしくお願いします」

眼鏡、スーツ、短髪男性のヨーランはニツコリと笑った。

しかし、スイナの頭の中では違う事を考え中。

（なんで・・・よりによってウェルクが隣？）

ぶっちゃけ、恐ろしかった。

その当事者のウェルクはというと、ぼーっと黒板を見つめている・・・つーか寝てる。

「では、今から皆さんに自己紹介でもしてもらいましょう。では、君から」

ヨーランに指名され、一列目の一番廊下側の生徒がその場で起立。

「クシィ・キルランです。まあ・・・よろしく」

「では、次の人」

クシィの次に起立したのは、なんだか貴族っぽいお坊ちゃん。

「僕はイーマール・エルガレス。皆、よろしゅう頼むぞよ」

金髪、低身長、色白のイーマールは堂々と着席。

「では、次の人」

次に起立したのは女の子。

淡い蒼色のショートヘアに、ツンとした目。

「サノン・ユテールア。よろしく」

感情ない、冷たい声。

「はい、じゃあ次」

休み時間

スイナは机に伏せていた。

理由は先程の自己紹介でテンパったスイナは見事に噛みまくり、自爆したのだ。

（はぁ……やっぱりキャラ作りとかしないとダメかなぁ？）

スイナが自己嫌悪していると・・・

「なにしてはるん？」

「ん？」

スイナが顔を上げると、そこにはクシイの姿が。

「いや、別に・・・ただ机に伏せていただけ」

「って事は今、暇って事やね？」

クシイは机に片手をついた。

「俺、このクラスに親しい奴いなくてな、少し話し相手になってくれんか？」

「え？別にいいけど・・・」

スイナは少し姿勢を正す。

「ほんま？じゃあ早速で悪いんやけど、スイナ、このクラスの事と思う？」

「え？何で？」

「だってな、このクラス、貴族んとこの子が二人もおるんやで？普通、貴族の子は貴族の子だけで特編にならんか？」

「え・・・？」

そんな事言われてもさっぱり分からないスイナ。

「だってオカシイやろ？ 貴族のボンボンは普通、他人との関わりを持ちたない生物やで」

「そ、そんな事言われても・・・」

何がなんだかである。

「て、言うかクシィ、その貴族の子ってのは誰なの？」

「え！ 知らんの！？」

「あー・・・まあ、うん知らなくて・・・」

「はあ〜」

仕方ないの、と言いながら前の列を指差すクシィ、そしてそつちに目をやるスイナ。

「イーマール・エルガレスにサノン・ユテーリア。両方ともこのトゲラ帝国の政権を握っている大貴族、エルガレス家とユテーリア家の正当な後継者。普通知ってるで、みんな」

「あ・・・あはは、わ、私政治とかあんまり興味なくて・・・」

と言うのは嘘。本当は貧困国のホラエラには、そんな他国の情報などが入って来ないのだ。

「そうかい・・・俺は政治とか歴史とか、そういうの大好きやら、何となく覚えてっちゃうんやけど・・・」

その時

ガラガラガラっ

教室の前の扉が開き、担任のヨーランが入室。

それに合わせ、皆、着席。

「はい、では、えー、今から皆さんにちょっとした適性検査をしてもらいます」

（適性検査？）

スイナはヨーランに注目する。

「詳しい事は現地で話します。とりあえず皆さんは訓練用の戦闘コートに着替え、この校舎の裏に集合して下さい」

そう言ってヨーランは教室を出て行った。

「は？」

スイナ含め、皆が思った事、それは「何すんの？」の文字。

超手短に話して消えて行ったヨーラン先生。

マジで何すんの？

訓練用の戦闘コート、それは入学一次試験の時に着た灰色の防具コートの事。いわば体育用のジャージ代わりの物だ。

大量の疑問と僅かな不信感を持ちつつ、スイナは戦闘コートに着替え、校舎の裏に。

ちなみに、校舎の裏は少し広い空き地になっていて、その先には平たい小さな山がある。

「よし、皆さんちゃんと来ましたね」

相変わらずスーツ姿のヨーラン先生。

「では、今から簡単なテストを行います。まずはルールを説明しましょう」

黒の二組、適性検査

内容…五人一組でチームを組み、校舎裏の山「カシス山」の山頂

を目指してもらう。

ルール…先にカシス山の山頂にあるロウソクに火を燈したチームの勝ち。

注意事項…このカシス山には下級の悪魔が生息している。護身用として学園側から一人一つ、ダクラニウム製の武器を貸し出す。

「つまり、今から退魔師にとってとても重要な「適応力」を試します。貴方達は先程入学式を終えたばかりで、ほぼ初対面状態。退魔師には、こうした初対面に等しい人と任務に行かされる事があります。その時、初対面だからと言ってチームワークがバラバラだったら、悪魔相手に任務は成功しません。ですから皆さんには今、くじ引きでチームを決めてもらい、その即席チーム内でどのように行動するか、適応するかをチェックさせてもらいます」

そう言うところランは割り箸が10本入った箱を持ってきた。

「では、今からチーム決めをします。割り箸の先端には赤か青の色が書かれています。さ、では先程自己紹介をした順で、クシイ君から引いて下さい」

「おし」

クシイは箱から適当に割り箸を引く。

「あ、青だ」

「はい次、イーマール君」

「フッフ、僕と同じチームになった奴は幸せ者だな、ハハハ」

結果、青

そして・・・

青チーム

クシィ、イーマール、サノン、ウェルク、スイナ

（まさかの事態！！）

スイナは青い割り箸を持ちながらビツクリ。

（め、面倒臭そうな奴らが揃った・・・）

貴族の子二人に怖い人、なんか政治にうるさい人・・・

「おお、頑張ろうなスイナ！」

「う、うん・・・」

クシィは笑顔、一方あちらでは・・・

「ふん、ユテーリア家なんてイマドキ古い。これからはこのイー
マール率いるエルガレス家の時代なのさ!!」

「・・・・・・・・」

「って、オイ！」

「・・・・・・・・」

「聞いているのか、ユテーリアの女!!」

「・・・・・・・・」

「オイっ!!」

貴族が言い争い中。

そして・・・

「・・・フゥ」

ウェルクはつまらなそうにうとうとしている。

そして

「武器は西洋剣、太刀、弓、槍、ハンマー、ナックルダスター、
ウィップ、ダガー、クロスボウの9つから選んで下さい」

ヨーランはそれぞれの武器を持ってきた。

で、結果

スイナ…西洋剣
ウェルク…太刀
クシイ…弓
イーマール…ダガー
サノン…槍
に、なった。

「ちなみに、ロウソクはチームの五人が揃った状態でないと着火しないように術が掛かっています。それから、万が一ギブアップする場合はこの発煙筒を投げて下さい。すぐに助けに行きます」

ヨーランは発煙筒を皆に手渡す。

「では、いきます。位置について」

(うわっ!!)

スイナは急いでスタートラインに。
クシイ、イーマール、サノン、ウェルク、そして赤チームの五人がスタートラインについた。

「よい」

スイナは手持ちを確認、西洋剣、発煙筒、ロウソクに火を付ける
マッチ、一応持ってきた飲み水。

「どん!!」

ヨーランの合図で一斉に走り出す生徒。

何しろ、このテストは一学期の成績に入るのだ。

さらに、制限時間は日の入りまで。

日が沈むと悪魔は活発になるからだ。

かくして、入学初日から聖十字黒白学園のテストは始まった。

第7話：貴族（後書き）

はぁ～・・・最近、花粉症が酷くてなかなか眠れない日々が続いています。

今年はいつもより花粉の到来が早い気がするのは自分だけ・・・？
くしゃみが酷くて大量にティッシュが減っていく・・・。

で、次回、スイナ達初のテスト！その行方は！？

はぁ～、誰か杉の木全部伐採してくんないかな・・・（無理
だろうけど）

第8話：登山開始

カシス山でのチームワーク適性検査。

現在、午後2時ちよい過ぎ。

そして、今日の日の入りは4時頃。

つまり、タイムリミットは約2時間。

カシス山は約400メートルの山。普通に登れば2時間はかからない。

「あ、あれは！」

登山開始から2分、スイナ達青チームは先頭にスイナ、次にクシイ、サノン、イーマール、そしてしんがりにウェルクと言うフォーメーションで登山をしていた。

そして、先頭を歩いていたスイナが何かを発見した。

「どうした？」

クシイはスイナの異変に気付く。

「みんな止まって！」

スイナは小声で皆を静止させる。

「な、なんだね？」

イーマールは腰のホルダーからダガーを取り出し、辺りを確認。

「……あそこに“屍騎士”がいる」

「屍騎士？」

グールナイト 屍騎士とは、グールホースグール 屍馬に屍がくっついた悪魔。

分かりやすく説明すると、神話とかにでてくる「ケンタウルス」とほぼ同じ、下半身が屍馬、上半身が屍の悪魔だ。

「どうする？ 屍騎士、2、3体はいるみたいだけど……」

「……ここはスルーした方がええんちゃう？」

クシイは回避を提案。少しばかり遠回りになるが、安全に登山できる。

「いや、ここは奴らを倒すべきだ。さっさと倒してさっさと山頂に行こうではないか、庶民よ！」

イーマールは倒す事を提案。

「サノンとウェルクは？」

名前うろ覚えのスイナ。少し小声で質問。

「・・・どっちでも」

「・・・」

対して意見にならない・・・

「・・・じゃあ、倒しますか？」

クシイは背中から弓を取り出した。

「フハハハハ、庶民は僕の意見についてくれば良いのだ！」

イーマーラはダガーを構え、屍騎士に向かい一直線。

「あ、ちょっと待って!!！」

スイナはある事に気付き、イーマーラを呼び止める。しかし、イーマーラは屍騎士に向かいダッシュ!

「どうしたスイナ? 俺らもはよ行こうや」

「ち、違う! ほら、あそこ、屍騎士のすぐ側の茂みの中!」

「ん?」

クシイはスイナに指摘され、その茂みの中に目をやる。

「あれは・・・」

その茂みからはよろっと、キノコみtainなものが二つ。

「あれ“木巨人”の触感じゃない？」

ウッドイマン
木巨人とは、木に憑依する悪魔の一種で、大きさは手の平サイズ。
しかし・・・

「木巨人のあの触感から出される胞子を吸い込むと、体が麻痺しちゃって動けなくなっちゃうんだよ!？」

「つて事は・・・」

木巨人の胞子をイーマラーが吸い込む⇒麻痺してイーマラーダウン⇒屍騎士の餌食に・・・

「ヤバイやん!!」

「ね、ヤバイでしょ」

ヤバイ、ヤバイと焦る二人。

そして見事に・・・

「あれ?体が動かん?なんだ？」

遠くから聞こえたイーマラーの声。

「うぐっ・・・な、何なんだコレ・・・ってうわぁー!?!」

屍騎士がゆっくりとイーマラーの前へ・・・

「へ!?!ま、ちよっ、ちよっと待って!?!」

イーマラー大ピンチ!

「クシィ、早く助けに行こう!!」

「待てスィナ、今俺らが行ったらあの貴族の二の舞やで!」

「で、でも・・・」

このテストは五人揃わないとクリア出来ない。
つまり、今ここでイーマラーがリタイアの発煙筒を投げでもしたら・・・

「まだ、リタイアはしたくない!」

しかし・・・どうしようか・・・

「・・・ツチ」

その時、スィナの背後で舌打ちが。

「まったく、だりーな」

「う、ウェルク!?!」

そこにいたのはウエルクだった。

「貴族のボンボンなんてどうでもいいが……これはテストだ。仕方ない」

するとウエルクは鞘から太刀を抜く。

スー……っと銀色に輝く太刀。

「うえ、ウエルク！あそこに木巨人が……」

スイナの忠告無視。

かなりの速さで屍騎士に突っ込んでいくウエルク、右手には太刀。

「おお庶民、早く僕を助けてくれ！」

イーマールは木巨人の胞子のせいで直立不動状態、目の前には屍騎士が三体に木巨人の触感。

「……………」

ウエルクは先に木巨人に狙いを定める。

そして……

「四天流“雨”『霧雨』！！」

その時だった。

スイナの目に映ったのは無数の刀。

まるで霧雨のように薄く、雨水のように大量の刀、そしてそれは木巨人を一瞬で貫いた。

「凄いなあ、刀の残像が見えるわあゝ！」

と、言うのがクシイの感想。

木巨人はあっという間に滅された。

「うおっ！！」

それに伴い、イーマラーの麻痺が解けた。

そして、ウエルクの次の獲物は屍騎士。

「四天流“雪”『吹雪』！！」

ウエルクは右足を軸に太刀を水平にし、踏ん張りながら強烈な一撃を屍騎士の右側に入れた。

「グヒッ！！」

今の一撃で屍騎士一体を撃破。

しかし、残りの体はウエルクを挟み撃ち。

「グヒヒ！！」

奇妙な声を上げながら、屍騎士は自らの武器である鋭い爪を立て、

ウエルクに襲い掛かる。

しかし

「めんど・・・仕方ない、一撃で行くか」

ウエルクは太刀を逆手で持ち、

「四天流“雪”『霰』!!!」

ウエルクは太刀を逆手持ちしながら、勢いよくクルッと回転。
太刀の刃は見事に屍騎士の体を斬り裂いた。

辺りには屍騎士の体液が飛び散った。

「うわっ!!!」

その体液の一部はイーマールを直撃。

「ぎゃー!!! 臭っさいコレ!!!」

しかし、ウエルクには体液がかからない。

そして、彼の目の前には、屍騎士の最後の姿があった。

「すご・・・」

遠くから観戦していたスイナは驚嘆の声を上げた。

まさに10秒、10秒で四体の悪魔が滅された。

「あれが天候を模して作られた流派『四天流』か……」

クシィは興味深げにながめている。

「……四天流、か……」

サノンはただ、ずーっとウェルクを眺めていた。

第8話：登山開始（後書き）

さて、もうすぐ卒業式シーズンですね。

卒業式と言ったらやっぱり「♪白い光りの中に」ですよ？

何かアレを聞くと、自分達の卒業式でなくてもジーンときませんか？え、来ない？

・・・ってあれ？そう言えばこの曲のタイトルってなんだっけ？あれ？

ど、ど忘れした〜！！

で、次回、スイナ達は見事登頂できるのかっ！？

最終話：退魔師（前書き）

どうも。

本編最終回です！！

最終話…退魔師

「ヨーラン先生」

カシス山の入口

そこにはヨーラント、もう一人の教師の姿が。

「本当に大丈夫なんですか？この山の山頂には確か・・・」

「大丈夫です」

ヨーランはきっぱり言った。

「これくらいやってもらわないと、もう退魔師どころではありませんし」

そう言って、ヨーランは山の山頂の方を見上げる。

カシス山の山頂

そこに住まうのは

「黒炎竜ヴァンダル・・・だとッ!!」

スイナ、クシィ、サノン、イーマール、ウエルクの五人は、山頂まであと数歩の所まで来ていた。

しかし・・・

「ギャアオオオオオ!!!!」

そこにいたのは、カシス山最後の番人。

漆黒の甲殻、鋭い牙、太い四本の脚、背中から生える黒炎の翼、太く堅い角、真っ黒な瞳。

悪魔の中でもかなりの上位ランクに値する竜系悪魔の一種、黒炎竜ヴァンダルだ。

「ま、マジかよ!!」

既にイーマールの足元には、汗の水溜まりが。

「そんな・・・」

その黒い瞳が、五人を捕らえる。

「・・・勝算は、少ないなあ」

そう言いながら、弓を構えるクシィ。

「・・・竜か」

サノンもまた、槍を構える。

「え、ちよつ、アレと戦うのか!？」

人間の約五倍はあろう巨体。

「・・・おいスイナ」

「えっ？」

スイナもまた、西洋剣を構えようとしていたが、その時ウエルクが話し掛けた。

「俺ら四人が奴を足止めすつから、お前はさっさと山頂行って、火い燈してこい」

「は!？」

スイナはウエルクの顔を伺う。

「多分、五人で行ってもコイツ相手に勝算は少ない。なら、確実に試験をクリアするために、無理にコイツを倒さず、さっさと火い燈して試験を終わらせた方がいい」

そう言いながら、ウエルクは鞘から太刀を抜く。

「だ、だからって、何で私なの!？」

「何でだと？」

かなりの重役にあたふた状態のスイナ。
そんなスイナを、ウエルクは鼻であしらう。

「お前が“カタラ家”の人間だからだ」

退魔師の原点

それは、突如この世に現れた悪魔に、刀一つで斬りに掛かった、
勇気ある青年の行いによるもの。

彼の名前は

メデイリア・カタラ

「四天流“雷”『牙雷鬼斬』!!」

ウエルクの持つ太刀は、雷の如く黒炎竜の前脚に斬り込む。

「ギヤアオオオ!!」

次の瞬間、黒炎竜はその口から黒炎のブレスを吐き出す。

ブオオオオオ!!

「チッ!!」

ブレスを避けるため、ウエルクは一旦後退。

その隙に、サノンとイーマールが反対側から斬りに掛かる。

「・・・フッ!!」

「ハアアアア!!」

二つの刃は、黒炎竜の脚に小さな傷を作った。
そして・・・

「後ろ、ガラ空きやで!!」

黒炎竜の後ろにある木の枝の上から、クシイは弓を構え、放つ。

ヒュンッ!!

「ギャアオオオ!!」

見事、背中に命中。

「後は任せたで、スイナ・カタラ」

(みんなが作ってくれた隙・・・絶対にロウソクに火を・・・)

スイナは全力疾走。

(・・・ッ!!)

その時、黒炎竜と目が合った。

そこには、畏怖の気持ち。
しかし・・・

「・・・私は、退魔師になるんだ。だから、だから・・・」

スイナは走った。

そして、ロウソクの元へ。

「ここで怖がつて、足を止めちゃいけないんだ」

そして、この日のカシス山上空に、ひとすじの煙が、天高く昇っていた。

最終話：退魔師（後書き）

短期間でしたがありがとうございます！！

中途半端な感じですが、黒白の退魔師は一旦完結です！

改めまして、本当にありがとうございました！！

黒白のエピローグ

あれから数年後の世界

ホラエラ共和国

モルフオの森

「誰か、誰か助けて!!」

その日、一人の少女が、森の中を走っていた。

彼女は、何かに追われていた。

「嫌、嫌あ!!」

その時、彼女は足元にあった木の根に気付かず、それに足を取られ転倒。

「キャッ!!」

彼女は、後ろへ振り向いた。

そこにいたのは、巨大な黒い悪魔。

そして、その悪魔は彼女に襲い掛かる。

「助けて、誰か助けて!!」

彼女は叫んだ。

その時・・・

ズサッ・・・

悪魔は突然、真っ二つになった。

「えっ・・・」

彼女は目を見開いた。

そこには、西洋剣を持った、黒いコートに身を包んだ女性が一人。

「あ、あ・・・」

怯える少女に、黒いコートの女性は、手を差し延べた。

「大丈夫、助けにきたよ!!」

この世に悪魔がいるかぎり、退魔師は人々を救うため、戦う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8005i/>

黒白の退魔師

2010年10月8日13時48分発行